

◎巻数 全6巻・付録つき  
◎付録 岡本綺堂自筆原稿  
『廿九日の牡丹餅』  
戯曲『勘平の死』前・後編

◎解説 浅子逸男(花園大学文学部教授)

◎体裁 B5判・上製 総約2,050頁  
◎価格 第1回配本(第1巻〜第3巻) 2017年7月  
本体66,000円+税 ISBN978-4-908976-30-8  
第2回配本(第4巻〜第6巻) 2018年4月  
本体66,000円+税 ISBN978-4-908976-34-6

◎揃定価 全6巻 本体132,000円+税

◎推薦 逢坂 剛(作家)  
浜田雄介(成蹊大学文学部教授)  
平岡敏夫(筑波大学名誉教授)

### 百年目の半七捕物帳

「半七捕物帳」は捕物帳の嚆矢である。

またその連作は、近代日本における時代小説・探偵小説草創期の傑作である。1917年に雑誌連載が始まり、中断を経て、1937年まで多くの短編が発表された。

しかし現在では、発表された順番で本文を読むことはできない。また初出雑誌と後に纏められた単行本や文庫本や全集とを比べると、数多くの異同が見受けられる。本文への加筆や削除はもとより、語り手である半七や岡っ引きの生年や年齢や名前、さらに、そのタイトルまでもが改変されている。

本企画では、初出雑誌に掲載された本文と挿画を、発表年代順に収録し、第1巻巻頭に解説を記し作品の冒頭には詳細な解題と書誌情報を付して復刻するものである。

### 関連図書のご案内

#### 猟奇 復刻版

ミステリ雑誌シリーズ1

猟奇社刊「1928年〜1932年」

- ◎巻数 全6巻
- ◎解説・付録・総目次・索引付
- ◎監修 浜田雄介
- ◎解説 小松史生子
- ◎付録 『探偵・映画』創刊号・11月号
- ◎体裁 A5判・上製 総約2,430頁
- ◎揃定価 本体120,000円+税
- ◎推薦 芦辺拓/一柳廣孝

★既刊【残部僅少】

#### 黒猫 復刻版

ミステリ雑誌シリーズ2

イヴニング・スター社刊「1947年〜1949年」

- ◎冊数 全11冊・別冊1
- ◎別冊 監修の辞・解題・総目次・索引
- ◎監修 浜田雄介
- ◎解説 石川巧
- ◎体裁 B6判・並製 総約900頁
- ◎定価 本体45,000円+税
- ◎推薦 山前譲

★既刊

#### 妖奇 復刻版

ミステリ雑誌シリーズ3

オールロマンス社刊「1947年〜1952年」

- ◎巻数 全21巻・別冊1
- ◎別冊 解題・総目次・執筆者索引
- ◎解説 石川巧/浜田雄介
- ◎体裁 B5判・上製 総約7,000頁
- ◎揃定価 本体378,000円+税
- ◎推薦 芦辺拓/山前譲

★刊行中(2016年〜2019年5月)

### 三人社

〒606-8316  
京都市左京区吉田二本松町4 白亜荘  
電話 075-762-0368  
FAX 075-762-0369

※図書館様・書店様へ  
小社は少数出版のため大取次の口座はございません。ご注文は直接上記までお申し込みください。

# 時代推理小説のさきがけ 綺堂の傑作を初出雑誌で読みなおす

◆初出誌の挿絵、ルビ、活字、行間で描出される江戸末期の風俗  
◆一話ごとの冒頭に解題を添え、流布本との違いを詳述

編集復刻版「1917年〜1937年」

# 半七捕物帳

初出版

# 集成

全6巻・付録1

解説 浅子逸男

推薦 逢坂剛/浜田雄介/平岡敏夫

付録 岡本綺堂自筆原稿

『廿九日の牡丹餅』  
戯曲『勘平の死』前後編

2017年7月刊行開始

限定60部

三人社



# いや増す『半七捕物帳』の魅力

——初出本文で読む——

平岡敏夫（筑波大学名誉教授・群馬県立女子大学名誉教授（元学長））

浅子逸男氏は長く『半七捕物帳』に当たってきた人である。岡本綺堂が幕臣（御家人）の子弟であることも教わった。

浅子氏の初出探索の労により、初出文と新出版社版とは作品によってかなりの違いがあることが判った。たとえば、『女行者』（大正十三年一月）面白倶楽部）は「K老人は江戸のうまれで、江戸のことをよく知つてゐた。老人がこんな話をした。」ではじまるが、新出版社版（同年五月）では「明治三十二年の秋とおぼえてゐる。わたしが久松町の明治座を見物にゆくと、廊下で半七老人に出逢つた。」と書き出している。明治の面影が近づいてきた感じだが、「K老人」とはだれだろう。

これだけでも読者としては興味津々、初出本文が読みたくなる。浅子氏から『松茸』の例も聞いているが、明治に入って薩長藩閥政府に圧迫された御家人ら佐幕派の子弟が文学の道に進んだことを思えば、綺堂の『半七捕物帳』が描き出す庶民の哀話も一段と身にしみる。

初出版から読み直し、人物の動き、作品の展開をあらためて辿る。いや増す『半七捕物帳』の魅力。初出版で読む楽しみ、その期待は格別なものがある。

# ミステリーの源流を訪ねて

逢坂 剛（作家）

近代文学史上、探偵小説と呼ばれるジャンルを確立したのは、コナン・ドイルの『緋色の研究』（一八八七年）に始まる、シャーロック・ホームズのシリーズだろう。二〇世紀にはいる前後から、ホームズものの翻訳が日本の読書市場に、続々と流れ始めたと思われる。一八七二年生まれの岡本綺堂が、それらのホームズものを愛読したことは、想像にかたくない。その嗜好がしだいに高じて、ついに自分でも書いてみようと思ふ筆を取ったのが、半七の捕物シリーズである。これが日本における、探偵小説の始まりといつてよい。

このシリーズで、当時（大正時代の半ば）の現代ものとせず、江戸末期を舞台としたところに、綺堂の独自の工夫が感じられる。小説に、『捕物帳』という用語を使ったのも、綺堂が初めてだろう。当初半七の年齢など、個人的プロフィールに多少の齟齬があったのは、二〇年も続くシリーズになるとは、綺堂自身も考えていなかったからではないか。

この半七ものの初出版集成は、そうした軌跡をたどる意味でまことにおもしろく、また好事家には江戸末期の風俗を知るのに、貴重な資料となるだろう。作家にとつても、脚本に長じていた綺堂の会話は、当時の市井の人びとの語り口を知るのに、裨益するところまことに大、といわねばならない。広く江湖にお薦めするゆえんである。



娯楽世界（第一巻）

二〇〇

## 江戸捕物奇談 化銀杏

岡本綺堂



「これは私の係り合つた仕事ぢやありません。又聞きてすから幾らか間違つてゐるつがあるかも知れませんが、お話を先づ斯うして」とお馴染の半七老人が話した。嘉永五年十一月二十四日の出来事である。江戸通旅籠町の茶持で、茶と茶道具一切を商つてゐる河内屋重兵衛の店へ、本郷森川宿の旗本稲川伯耆の屋敷から使が来た。稲川は四千五百石の大身で、その用人の

石田源右衛門が自身に向いて来たのであるから、河内屋でも疎略には扱はず、すぐに奥の座敷へ通させて、主人の重兵衛が挨拶に出ると、源右衛門は聲を低めて話した。「餘の儀でもござらぬが、御當家を見込んで少々御

本集成で『半七捕物帳』が全部で何話なのかを明言していないのは、「広重と河瀬」や「少年少女の死」、「雷獣と蛇」がふたつの話をひとつにして半七老人が語るように書きかえたためである。また、残念なことに、そのなかの「河瀬」と「蛇」の初出本文が見つからない。ほかに「雪達磨」「半七先生」「狐と僧」を加えると五篇が不明のままである。それらとあわせて完璧な初出版『半七捕物帳』とすることがこれからの課題である。

### 内容組見本



#### 「化銀杏」（江戸捕物奇談）

【解題】

初出は、『娯楽世界』大正八年一月号（7巻1号）。挿絵は鱒崎英朋。「江戸捕物奇談」の角書がつけられていた。

「これは私の係り合つた仕事ぢやありません。又聞きてすから幾らか間違つてゐるのがあるかも知れませんが、お話の土臺は先づ斯うです」とお馴染の半七老人が話した。という出だしで始まるように、初出では「半七

初出誌  
娯楽世界  
7巻1号  
発表年月  
大正八年一月

聞書帳」と同じように活躍するのは半七ではない、本郷の山城屋金平という岡つ引で、事件は嘉永五年のこととして語られていた。新出版社版で半七が直接かわる話に変えられ、時代も文久元年にうつされた。半七がかかわった事件ではないというだけに、初出では種明かしや後日談が省かれている。



全巻構成と収録一覧

記本年月	復刻版巻数	収録作品名	初出誌	発表年月
第1回配本 2017年6月刊	第1巻	解説		
		お文の魂(半七捕物帳巻の一)	文芸倶楽部 23巻1号	大正6年1月
		石燈籠(半七捕物帳巻の二)	文芸倶楽部 23巻3号	大正6年2月
		勘平の死(半七捕物帳巻の三)	文芸倶楽部 23巻4号	大正6年3月
		湯屋の二階(半七捕物帳巻の四)	文芸倶楽部 23巻5号	大正6年4月
		お化師匠(半七捕物帳巻の五)	文芸倶楽部 23巻7号	大正6年5月
		半鐘の音(半七捕物帳巻の六)	文芸倶楽部 23巻8号	大正6年6月
		奥女中(半七捕物帳巻の七)	文芸倶楽部 23巻9号	大正6年7月
		帯取の池(半七捕物帳後編巻の一)	文芸倶楽部 24巻1号	大正7年1月
	第2巻	春の雪解(半七捕物帳後編巻の二)	文芸倶楽部 24巻3号	大正7年2月
		朝顔屋敷(半七捕物帳後編巻の三)	文芸倶楽部 24巻4号	大正7年3月
		山祝ひ	探偵雑誌 3巻4号(春期特別号)	大正7年4月
		お照の父(半七捕物帳後編巻の四)	文芸倶楽部 24巻5号	大正7年4月
		猫婆(半七捕物帳後編巻の五)	文芸倶楽部 24巻7号	大正7年5月
		筆屋の娘(半七捕物帳後編巻の六)	文芸倶楽部 24巻8号	大正7年6月
		踊の渡ひ	新小説 23巻10号	大正7年10月
		化銀杏(江戸捕物奇談)	娯楽世界 7巻1号	大正8年1月
		三河萬歳(半七間書帳巻の一)	文芸倶楽部 25巻1号	大正8年1月
第3巻	槍突き(半七間書帳巻の二)	文芸倶楽部 25巻3号	大正8年2月	
	人形使ひ(半七間書帳巻の三)	文芸倶楽部 25巻4号	大正8年3月	
	向島の寮(半七捕物奇談)	娯楽世界 7巻3号	大正8年3月	
	広重の絵	婦女界 21巻1号	大正9年1月	
	張子の虎(半七間書帳後編の巻)	文芸倶楽部 26巻5号	大正9年4月	
	甘酒売(半七間書帳後編の二)	文芸倶楽部 26巻7号	大正9年5月	
	津の国屋(捕物奇談)	娯楽世界 8巻6~8号	大正9年6~8月	
	小女郎狐(半七間書帳後編の三)	文芸倶楽部 26巻8号	大正9年6月	
	旅絵師(半七間書帳後編の四)	文芸倶楽部 26巻9号	大正9年7月	
	熊の死骸(半七間書帳後編の五)	文芸倶楽部 26巻11号	大正9年8月	
	松茸(半七間書帳後編の六)	文芸倶楽部 26巻12号	大正9年9月	
	鷹匠(御存半七捕物帳)	文芸倶楽部 28巻1号	大正11年1月	
	蛙の水出し(探偵物語)	サンデー毎日 1巻16号(夏期臨時増刊)	大正11年7月10日	
	弁天娘(半七捕物)	講談倶楽部 13巻8号	大正12年6月	
	雷獣(江戸物語)	婦人世界 18巻8号	大正12年8月	
	鬼娘	講談倶楽部 13巻13号	大正12年9月	
	第4巻	異人の首	週刊朝日 17号(十月増刊)	大正12年10月10日
		女行者(捕物奇談)	面白倶楽部 9巻1号	大正13年1月
潮干狩		新青年 5巻1・3号	大正13年1・2月	
*江戸文学に現れた探偵物語		新青年 5巻2号(新春増刊号)	大正13年1月	
仮面		新青年 5巻5号	大正13年4月	
冬の金魚		講談倶楽部 14巻5・7号	大正13年4・5月	
一つ目小僧		サンデー毎日 3巻29号(夏期特別号)	大正13年7月1日	
柳原堤		旬刊写真報知 3巻1~5号	大正14年1月5日~2月15日	
蝶合戦		講談倶楽部 15巻4号	大正14年4月	
むらさき鯉		講談倶楽部 15巻10号	大正14年8月	
三つの声		新青年 7巻1号	大正15年1月	
*半七捕物帳の思ひ出		文芸倶楽部 33巻10号	昭和2年8月	
白蝶怪		日曜報知 92~106号	昭和7年2月28日~6月5日	
十五夜御用心(半七捕物帳第一篇)		講談倶楽部 24巻8号	昭和9年8月	
金の蠟燭(半七捕物帳第二篇)		講談倶楽部 24巻9号	昭和9年9月	
ズウフラ怪談(半七捕物帳第三篇)		講談倶楽部 24巻10号	昭和9年10月	
第5巻		大坂屋花鳥(半七捕物帳第四話)	講談倶楽部 24巻11号	昭和9年11月
		正雪の絵馬(半七捕物帳第五話)	講談倶楽部 24巻12号	昭和9年12月
	大森の鶏(半七捕物帳)	講談倶楽部 25巻1号	昭和10年1月	
	妖狐伝(半七捕物帳第七話)	講談倶楽部 25巻2号	昭和10年2月	
	新カチカチ山(半七捕物帳第八話)	講談倶楽部 25巻3号	昭和10年3月	
	唐人飴(半七捕物帳第九話)	講談倶楽部 25巻4号	昭和10年4月	
	かむろ蛇(半七捕物帳第十話)	講談倶楽部 25巻5号	昭和10年5月	
	河豚太鼓(半七捕物帳第十一話)	講談倶楽部 25巻6号	昭和10年6月	
	幽霊の観世物(半七捕物帳第十二話)	講談倶楽部 25巻7号	昭和10年7月	
	菊人形(半七捕物帳第十三話)	講談倶楽部 25巻8号	昭和10年8月	
	蟹のお角(半七捕物帳第十四話)	講談倶楽部 25巻9号	昭和10年9月	
	青山の仇討(半七捕物帳)	講談倶楽部 25巻10号	昭和10年9月(臨時増刊)	
	吉良の脇指(半七捕物帳)	講談倶楽部 25巻11号	昭和10年10月	
	歩兵の髪切り(半七捕物帳第十七話)	講談倶楽部 25巻12号	昭和10年11月	
	川越次郎兵衛(半七捕物帳)	講談倶楽部 25巻13号	昭和10年12月	
	第6巻	廻り燈籠(半七捕物帳)	講談倶楽部 26巻2号	昭和11年2月
		*半七紹介状	サンデー毎日 15巻44号(秋季特別号)	昭和11年9月10日
		地藏は踊る(半七捕物帳)	講談倶楽部 26巻13号	昭和11年11月
夜叉神堂(半七捕物)		キング 12巻13号(臨時増刊)	昭和11年11月	
薄雲の碁盤(半七捕物帳)		講談倶楽部 27巻1号	昭和12年1月	
二人女房(半七捕物帳)		講談倶楽部 27巻2号	昭和12年2月	
付録		岡本綺堂自筆原稿『廿九日の牡丹餅』 戯曲『勘平の死』前・後編		

第1回配本  
2017年6月刊

第2回配本  
2018年6月刊

この文字を、綺堂も見ていた

浜田雄介(成蹊大学文学部教授)

初めて読んだ「半七捕物帳」は、ニューヨークのブックオフで買った光文社文庫でした。海外研修中で、気候や文化の微妙な違いが身体にたまっていたためでしょうか、白石潔の言う「季の文学」としての捕物帳が妙に実感されたのでした。それで翌年、同じ文庫本をテキストに大学院で「半七捕物帳」を読むことにしたのですが、台湾からの留学生が「朝顔屋敷」を読み、登場人物が「二十六日冬の月」に顔を照らされるのは時間的におかしい、と気づきました。確認すると、なるほど初出では「十六日」と記されていたのです。「季」を感じ取るには文化や風習を当たり前のものとせず、本文を丁寧に検討すべきことを学生に教えられた次第です。

「半七捕物帳」は随時の改稿がなされましたが、通俗読物であるだけに、必ずしも綺堂の意図とは思えない改変も多々あるようです。流布本と異なる価値が初出にあるゆえんでしょう。本文内容だけの問題ではありません。江戸の描出が巧みすぎて忘れられがちですが、「半七捕物帳」は大正デモクラシーや関東大震災、昭和維新の時代に書かれ、雑誌に掲載された作品なのです。複写による今回の初出版は、その時代の挿絵、ルビ、活字、そして行間を再現してくれます。私たちと同じものを、岡本綺堂も見ていたはず。言葉というものが近代にもあるならば、そこに宿らないでどこに宿るのでしょうか。

